A Study of the Bollnow's Theory on Truth

Baiko Jo Gakuin College
Yosiyuki Hirooka

Bollnow characterizes the tradition of Greek thought as "truth reflected in a mirror, and that of Hebrew thought as "truth with gravity as in a huge rock".

He examines the following two interesting structual styles of conception regarding the truth. Namely, the conception about the truth in the Greek philosophy, which is one of the definitive features of European culture, is closely related to "recognition",that is, a proper expression about a given fact. Therefore, it seems that the conception about the truth in Greek thought is compared to a "mirror" which reflects the same thing exactly as it is.

On the other hand, the conception about the truth in Hebrew thought refers to human existence itself (*eine Seinsverfassung*) in a true sense, and the Hebrew thought seems to include the human personality and the trust in God. For this reason, it may be possible to name conception about truth in Hebrew thought "a truth with gravity as in a huge rock" on the ground that it can be constructed on the personality and the confidence mentioned above.

While the Greek thought as "a mirror truth" can be realized even when taking an indifferent attitude, the Hebrew truth is inevitably concerned with the subjective and existential practical ethics. The Hebrew truth as a "trustwothy rock" is essentialy differentiated from the natural scientific Greek truth as a "mirror"which can be expressed without his

own existential decision.

The purpose of the present paper is, firstly, to make clear the distinction between the natural, or scientific, Greek truth and the Hebrew thought as the existential truth. Secondly, I would like to demonstrate the fact, with a techinique of philosophical anthropology advanced by Bollnow, that the existential "encounter" with other people, which can be realized only through the "experience of resistance" is indispensable in order to obtain the existential truth.

ボルノーの真理論についての一考察

——道徳的・実存的真理の優位性の立場から——

広岡義之

一　問題の所在

O・F・ボルノー（O. F. Bollnow, 一九〇三—一九九一）は、ミハエル・ラントマン（M. Landmann）の『根源像と創造者の行為』[1]を援用しつつ、ギリシャ思想の伝統を「鏡」的真理と、そしてヘブル思想の伝統を「厳」的真理と特徴づけて、以下の真理概念の二つの構造様式について極めて興味深い考察を進めている。すなわち、西欧思想の決定的な特質の一つであるギリシャ的真理概念は、与えられた事実についての正しい言表、つまり「認識」と関わるが故に、同じものを正確に写し出す「鏡」に譬えて真理を把捉していたように思われる。他方これに反してヘブル的な真理概念は、「根源的な意味において一つの存在態勢（eine Sein sverfassung）」[2]（傍点筆者）を表し、それが人間の場合には人格的な真理として、さらには神の信頼性をも包含するものと考えられてきた。ヘブル的な真理概念はこうした人格性もしくは信頼性というもののうえに構築しうる「支えとなる真理」であるが故に「厳」的な存在の真理と名づけられよう。

先の二つの真理観の相違をみごとに浮彫りにしているボルノーの近著『真理の二重の顔』冒頭部で、彼はさらにヨハネによる福音書中のピラトによるキリストの審問の物語を引き合いに出しつつ、次のような考察を展開してゆく。「わたしは真理についてあかしをするために生まれ、また、そのためにこの世にきたのである。だれでも真理につく者は、わたしの声に耳を傾

ける。」(3)と自らの実存をかけて厳的真理を語るイエス・キリストに対して、他方ピラトは冷ややかに自己の立場を守ったまま「真理とは何か」という自らの主体をかけぬ即物的・認識論的で普遍妥当的な問いを発するのみで、二人の対話は擦れ違いのまま終わることとなる。ボルノーの解釈に従えば、キリストの自証に対してピラトが途方にくれたのは、ピラトの提案した真理が「たんに与えられた事実についての正しい言表」の域を越えていなかったからである。すなわち、ピラトの捉える真理、つまり「鏡としての真理」とは、傍観者的な立場で自らの立場をたな上げにしたたままでも語りうるのに対して、イエスの語ったヘブル的な「厳的真理」は、根源的な意味において主体的かつ実存的な実践が問題とならざるをえなかったと解せよう。ボルノーに即しつつ右の二人の在り方を敷衍すれば、イエスの語る信頼しうる支える力のある厳としてのヘブル的真理とは、人が真理の内に生きるという実存的な実践性を伴うか否かという一点で、自らの主体をかけずに述べることのできる鏡としてのギリシャ的・自然科学的真理と本質的に異なる。厳としての真理では、わたしたちの生きかたそのもの、つまり道徳的・人格的な存在真理が問われる点で認識真理とたもとを分かつことになるが、本稿における目的はこうした両者の真理観の相違を明らかにしたうえで、「認識真理とより深い存在真理」の人間への関わりをボルノー独自の哲学的人間学的手法に即しつつ探究することにある。(4)

その際われわれは、ボルノーの真理論の思想的歩みについて前期と後期でその力点の置かれ方が微妙に異なっている事実を考慮に入れておく必要があろう。ボルノーに従いつつ論点を先取りして言えば、厳的真理と深く関連する精神科学的認識は、他（者）との「出会い」という実存的決断にその究極の本質を置く。たとえば過去の文化遺産としての芸術作品等の厳密な解釈を、精神科学的な認識課題の最も単純な例とみなすならば、そのような真理を合目的性へと還元することは、このような出会いの本質である実存的な決断を正当に評価する可能性を閉ざしかねないからである。このようにボルノー前期の真理論においては、ディルタイの生の哲学の範疇をさらに越え出た実存哲学的な構成要素が含まれていることは注目に値する。ここにボルノー独自の真理論のオリジナリティーが存する、ともいえよう。しかしこのようなボルノーの思想は特に一九四九年代の『理解するということ』（Das

Verstehen. Drei Aufsätze zur Teorie der Geisteswissenschaften.）などの比較的初期の著作で前面に押し出されている主張であって、近著『真理の二重の顔』（一九七五）では、むしろ認識の真理と存在の真理、もしくは脅かす真理と支える真理という二つの真理の間の緊張関係の二律相関の重要性に力点が移行しているように思える。そこで本稿ではさしあたり主としてボルノーの比較的初期の真理論に的を絞って考察を展開していることをあらかじめ断っておかねばならない。

註

（1）M. Landmann, Ursprungsbild und schöpfertat. Zum platonisch-biblischen Gespräch. München. 1966.

（2）O. F. Bollnow, Das Doppelgesicht der Wahrheit. Philosophie der Erkenntnis. 2 Bd. Kohlhammer, Stuttgart. S. 9.

（3）ヨハネによる福音書、一八章三七節。

（4）なお、ボルノーの真理論についての優れた先行研究としては次の文献を参照のこと。
川森康喜著、「ボルノウにおける真理の本質」教育哲学研究、一九六四年、第一〇号。五〇頁－六七頁。
戸江茂博著、「真理への教育――ボルノウの真理論についての一考察――」関西学院大学教育学科研究年報第五号、一五頁－二五頁。
中野修身・優子著、「『存在の真理』について――ボルノーと西田哲学をつなぐもの――」金城学院大学論集一一六号、一九八五年。七五頁－八九頁。

二　二つの科学的領域における真理観の特徴

こうした二つの真理概念に関連して、極めて印象的な専門用語を用いて「法則定立的」（nomothetische）な科学という二つのグループのなかで対比させたのが、一八九四年のヴィンデルバンド（W., Windelband, 一八四八－一九一五）の学長就任記念講演である。つまり、ここでギリシャ的な真理に端を発する自然科学は一般的な法則を定立しようと試みるのに対して、他方精神科学の一分野である「歴史学では一回限りの特殊性を記述することが要諦であることを、ヴィンデルバンドは説いた」[1]のだが、これを自然科学と精神科学の特質という観点から敷衍すれば次のようにまとめることができよう。つまり、歴史性について考えるうえでの決定的な視点は、特定の空間的環境と特定の時間の中に生きる存在であり、さらに「人間は社会的歴史的環境に

限定されてはいないにせよ、拘束されてはいる。この指摘は、純粋な思弁に対抗して現実性（Realität）が哲学に取り戻されなければならないとした、生の哲学およびディルタイ（W. Dilthey, 一八三三－一九一一）の哲学の功績である。精神科学的教育学が教育の現実世界（Wirklichkeit）に関心を示すようになったのは、その一帰結であった。」(2)

このようなダンナー（H. Danner, 一九四一－）の指摘からも明らかなように、精神科学的教育学の特徴として第一に、教育・人間形成の歴史との関連で、一回性の個人的なものが重要視され、そこからこの一回性の事柄自体が教育学的反省の対象となる。すなわち、「教育・人間形成が関与するのは、標準化された人間ではなく個々の人間」(3)に他ならず、ここに至って教育学の領域で省察されるべき事柄は、純粋に自然科学的・数量的な方法では把捉されない人間・価値・教育の目的等の質的な諸契機でなければならないだろう。ダンナーによれば、物理学等のいわゆる自然科学が一般的な法則性を追求する一方で、精神科学は歴史的・人間学的な基本構造をその特徴とする。つまり、実証的な自然科学では、法則性を見つけだすための明確なデータ、すなわち数量的な諸要素を取り扱うことが基本となるが、他方、精神科学においては、意味・価値・人格の一回性・美などの内容に関わる質的な諸要素が重要な契機となる。そのために、自然科学が結論に到達するためには計測や数量化さらには仮説の可能性が大前提となって初めて、与えられた事実についての正しい言表や没主観的・即物的で普遍妥当的な「鏡としての真理」が獲得されてゆく。それに対して、精神科学では洞察・記述・解釈をその方法論的な根拠として、人格性や信頼性という「厳としての人間の実存的で主体的な真理」が初めてその姿をわれわれの眼前に現わすこととなる。(4)

右の二つの真理観との関連で、われわれはここでヤスパース（Karl Jaspers, 一八八三－一九六九）に眼を転じて具体的に考察してみよう。ヤスパースは『哲学的信仰』（Der philosophische Glaube, 一九四八）において、知と信の決定的相違を知の代表者すなわちギリシャ的な自然科学的真理に従事する者としてガリレオ・ガリレー（Galileo Galilei 一五六四－一六四二）を、そして信の代表つまりヘブル的な実存的・主体的な精神科学的真理の実践者としてのジョルダーノ・ブルーノ（Giordano Bruno 一五四八－一六〇〇）を引き合いにだして次のような例をわれわれに提示して

くれる。

当時はまだ天動説が一般的な世界観であり、当時の権力者であったローマ・カトリック教会にとっても地球が宇宙の中心であるように、このローマ・カトリック教会も世界の中心であるという共通の世界観から天動説を信奉し、それを覆す説を唱えるものを宗教裁判の名のもとに抑圧していた。天動説を真っ向から覆す地動説を唱えたガリレーとブルーノの両者にローマ・カトリック教会からの弾圧の手が迫ったとき、この二人は全く対照的に異なる行為をとることとなった。結果的にはガリレーは太陽の周りを地球が回転するという地動説を裁判所で撤回したが、他方、ブルーノは自らの命をかけてまで地動説を守り抜き、ついには処刑され殉教する運命となった。ガリレーが裁判を終えての帰り際、「それでも地球は動くのだ」との呟きはあまりに有名な後世の逸話である。「両者は彼等によって代表された真理の意味に対して適当な或ることを為した。それから私が生きるところの真理は、私が真理と同一になることによってのみ存在する、真理はその現象においては歴史的であり、その客観的言表可能性においては普遍妥当的ではないが、併し真理は無制約である。」(Der Philosophische Glaube., S 11) と。ブルーノもガリレーも共に死の威嚇の下に地動説の撤回を強要されながら、自らの生ける現存在のためにガリレーはそれを撤回し、ブルーノは最後まで自らの立場を変えることなくついに殉教することとなる。

これとの関連で斎藤武雄は以下のような示唆に富む解釈を展開している。「意識一般の知即ち『無制約的ではなく、むしろ有限なものの関連における認識の諸前提と諸方法とに関係している」(ebd) ところの『その正当性を私が証明し得る所の真理』(ebd) (傍点筆者) ――これはまさに自然科学的な真理 (筆者註) ――をガレリーはもっていたが、死の恐怖の前にその知を撤回したのであって、生死を超えた無制約的な真理即ち信仰を彼はもっていなかったのである。かくの如く知は無制約的ではなく、従って単なる知に止まる限り無制約的行動はなされ得ない。ブルーノは『それによって私が生きるところの真理』をもっていたのであり、それを撤回することは自己を喪失することになるという意味の真理をもっていたのである。その真理は『私が真理と同一になることによってのみ存在する』真理であった。彼の信仰は彼の命題とを結合する愛の強烈な力によるものであったと言うべきであろう。」(5)

つまりこの両者の結末は、自然科学的な「認識の真理」と、哲学的・実存的で厳的な「存在の真理」に各々忠実に行動した当然の帰結であったといえよう。今日でも一般にガリレーの態度は「卑怯で臆病な態度」として批判され、ブルーノこそ自らの信念に忠実で権力にも屈服せず、壮絶な最後を遂げた偉大な英雄と解釈されがちである。しかしガリレーがあの時殉教していたならばそれはむしろ滑稽なことになっていたであろう。なぜならガリレーにとっては「地球が動く」という事実は一つの自然科学的な真理であり、それはいつでもどこでもだれでもが到達し獲得しうる累積発展可能な真理、すなわち反復可能で可測的なものへ還元しうる一般的な法則を定義しようとする「法則定立的な性向」（認識の教授可能性）を持つからであった。つまりガリレーは自らが体を張って守り通さなくとも後の科学者がいつか必ずや発見し証明してくれるだろう、あるいは歴史が必ずや私の地動説の正しさを示してくれよう、と考えたにちがいない。さらにこの自然科学的真理は客観的で没主観的・傍観者的性格のため、自らの立場を棚上げにしたままでも語りうるが故に、ガリレーは自らの命をあえて賭けてまで地動説に固執する必然性が存在しなかった。

しかし他方僧侶で思想家のブルーノにとって、地動説は自らの実存をかけて守り抜き、当時のローマ・カトリック教会の傲慢な姿勢に抵抗するという使命感の拠り所そのものであった。つまりブルーノが主張した地動説は、ボルノーがいうところのヘブル的な厳としての真理に他ならず、地動説という実存的・主体的な真理を守り抜いた彼は、徹底的に道徳的・人格的な存在真理の実践者でもあった。さらに言えば、ボルノーのいう厳的な真理は、ヴィンデルバンドのいう個性記述的な科学の範疇に属する。なぜならここでは一回性の個人的なものが重要視され、ダンナーの指摘するように純粋に自然科学的・数量的な方法では摑みきれない人間の価値や意味・人格性などの内容に関わる諸要素が重要な契機となるからである。こうしたブルーノの地動説は人生の意味の問題、つまりだれかが命を賭けてでも証ししなければ存続しえない実存的な真理であったが故に、彼は殉教という悲劇に巻き込まれざるをえなかった。このような実存的真理をキルケゴール（Sören Kierkegaard 一八一三―一八五五）は「主体性が真理である」（『哲学的断片への後書き』一八四六）という命題で言い表しているが、この実存的な真理とは反復や計測が不可能なばかりか、一人の人間の生き

方とその真理を決してたちきることができない性質を有する。ガリレーに象徴される自然科学的な真理は序論で触れられた「与えられた事実についての正しい認識」に向けられた鏡としてのギリシャ的な真理に符号するものであり、良くも悪くも自らの主体を賭ける必要のない、というよりも主体を賭けてはむしろ誤謬となるところの即物的で普遍妥当的な真理であると一般的にいえよう。ガリレーは自然科学者としての立場から徹底的に計測と仮説を通して地動説という一つの真理に到達した。しかし、彼にとって地動説は、ギリシャ的真理つまり与えられた事実についての正確で即物的かつ普遍妥当的な認識にすぎず、没主観と法則定立性をその基調とする結果、裁判所で自らの地動説をいとも簡単に撤回しえたのである。それに対して、ブルーノが命を賭けてまでかたくなに守り通そうとした「地動説」は、彼にとって根源的な意味で一つの「存在態勢」であり人格性さらには神への信頼性と直結する厳的な実存的真理であった。さらに僧侶であり思想家としてのブルーノにとっては、根源的な存在態勢に関わる人格性と神への信頼が「地動説」と分かち難く密接に結合していたがために、どこまでも主体的・実存的な実践が問題とならざるをえなかった。その上、一回性という個人的な要素が重要視されるために、カトリック教会の弾圧に対しても、自らの地動説を簡単に撤回しえなかったと考えるべきでろう。

註

(1) O. F. Bollnow, Die Lebensphiosophie. Springer, Berlin-Göttingen-Heidelberg, S. 136. 戸田春夫訳、『生の哲学』、玉川大学出版部、一九七五年。

(2) H. Danner, Methoden geisteswissenschaftlicher Pädagogik, Ernst Reinhardt, München 1979. S. 20. f. 浜口順子訳、『教育学的解釈学入門――精神科学的教育学の方法――』、玉川大学出版部、一九八八年。

(3) H. Danner, a. a. O. S. 21.

(4) Vgl., H. Danner, a. a. O. S. 22. f. 換言すれば、自然科学的領域における連関は因果的であるので特定の結論に必ず到達するのに対して、精神科学は意味の連関が問われることとなる。さらにそのことは、自然科学において証明（Beweise）が可能であるが、精神科学では示唆（Hinweise）をするところまでしか可能とならない、とダンナーは指摘する。

(5) 斎藤武雄著、『ヤスパースにおける絶対的意識の構造と展開』創文社、昭和五六年、一二六頁。

三　精神科学における真理概念

a　真理概念における普遍妥当性と客観性の相違

それでは特に精神科学において真理はどのように把捉されているのだろうか。この点を普遍妥当性と客観性という概念の特質の対比を通して検討することから始めよう。まず、精神科学が「科学」として承認されるためにはそこに自ずと客観性という概念が必要不可欠になると思われる。この客観性の基準としては一般に「普遍妥当性」が同義語的に対比して取り上げられるが、この概念は反復可能でかつ可測的なものへ還元しうる（認識の教授可能性）ため、すなわち、一般的な法則を定義しようとする性向をもつために、先のヴィンデルバンドと共に自然科学の特質に属するものと考えられよう。しかしながら他方で、精神科学の場合には、あるがままの自己を捉えるところから出発し、さらに本質的なものは測りえないという世界観に立脚するが故に、自然科学のみが普遍妥当性という意味での真理を所有しうる、とこれまで一般に考えられてきた。すなわち、ボルノーによれば「自然科学を範とする研究方向は、通常自分こそ現実性をもつ科学の唯一の可能な形式であることを主張し、それ以外のすべてのものを科学以前の臆見、したがって結局はばらばらの臆見とみなす。自分の方法で普遍妥当的な結果として獲得されたものだけを、科学的に有効なものとして認めるのである。」(1) しかし、ボルノーは客観性と普遍妥当性の本質的な連関についての右のような定式が本当に正しいのかどうかを今一度吟味してゆく。

認識の普遍妥当性の意味するところは、「認識が認識する人間の種々の特性から独立している」(2) が故に、あらゆる認識者にとって一つの認識に到達する可能性が含まれ、その意味でこれは序論で触れたところの「与えられた事実についての正しい言表」を志向するギリシャ型の鏡的真理の範疇に属するものといえよう。それに対して他方で、ボルノー独自の解釈によれば、精神科学における「客観性という概念は、……自己の対象をそれ自体の本質から理解することができると強調しようとするときに、現われてくる」(3) が故に、われわれはミッシュ（Georg Misch, 一八七八－一九六五）と共に、普遍妥当性の概念は精神科学の本質に不可欠なものではなく、むしろ自然科学の個別的な発展に即しつつ形成されてきた、と考えるべきであろう。とするならば、一般に自然科学における真理の基準としての普遍妥当性の概念は精神科学の領域においては完全に放棄されざるをえなくなる。なぜなら、普遍妥

当的な真理はどこまでも認識を純理論的に可測的に保証しようとする傾向をもつが、精神科学においてはむしろ真理は現実生活の場でのあるがままの自己を問題にし、本質的には数量化しえないものと考えられるからである。そこで、普遍妥当性に代わって一体何が精神科学の厳密な基準になりうるのかと問うた場合、精神科学の科学的性格をその固有の本質において捉えうるような領域を「ミッシュはディルタイの道を最後までたどり、客観性といい表し、そうしてこの客観性を固有な精神科学的概念として、普遍妥当性という自然科学的概念に対置する。」(4) たとえば、ボルノーは客観性についての例を好んで「裁判官の客観性」に看てとる。客観性とはここではある対象の関わりにおける事実性としての先入観の無さや公平さを意味するがその際、直接的な生の解決を前提とする裁判官は相矛盾する生についてまったき客観的立場を貫く必要に迫られてくる。このことは客観性と生の緊張関係へと導くものとなり、こうして裁判官の客観性は具体的な態度でそのたびごとに新しく実現されねばならない。(5) ここでわれわれにとって客観性と普遍妥当性の区別は、精神科学の方法論的基礎づけにとって決定的な問題となるばかりか、先の二つの真理概念を考察する際の核心的なテーマへと直結してゆくものと思われる。

先述のように認識の普遍妥当性とは、一般に認識が認識する人間の種々の特性から独立し、いうならばすべての認識者が必ず到達可能な真理のみを問題にする。たとえば、数学の諸命題は認識者の素質や能力、一時的な情緒とはまったく無関係に純理論的に獲得しうる性質のものだろう。さらに、自然科学的な鏡としての真理が普遍妥当性にその根拠を置く事実をボルノーは次のように述べている。すなわち、「認識を現実の純粋かつ明晰な反映として、つまり単なる模写とみなす場合にのみ、真理の概念から、真理の普遍妥当性が結果として生じるのである」(6)（傍点筆者）と。ボルノーによれば、普遍妥当性と客観性の特質を区別することは広く周知の事実であるが、ただいつもその相互関係が誤った仕方で解釈されてきたという。その誤解とは、普遍妥当性を真理の必要条件とみなしてしまい、そこから真理とは必然的に普遍妥当性を含むものに他ならないという考え方が定着してしまったことに由来する。この問題はすでに『精神科学の不可能性』(7) という題名の著書の存在でも明らかなように、以前からも論議されてきている周知の事実でもある。このことは「認識の確実性を純理論的仕方で保証しようとするような

態度から生じてくる」[8]（傍点筆者）が、ボルノー独自の立場によると、「むしろ真理は現実生活の場で真理が具体的にある程度頼りにされるかぎりで、はじめて姿を現わす」[9]（傍点筆者）という。こうした視座に立って初めて真理と普遍妥当性の類似的関連が崩壊し、新たに「まだ普遍妥当的である必要のない、むしろ人間のためにあるような一定の限られた範囲へと制約された真のかつ客観的な認識が存在しうる可能性の空間が、まさに開かれるのである。」[10]すなわち、このことは精神科学においては真に客観的なもの、つまり各々にとって同じやり方では到達しえない事物を含んだ証明可能な認識としての客観性が存在するということを意味するのみならず、この客観性は「普遍妥当性の基準」に代わる尺度の役目を果たすこととなる。[11]

b　精神科学的な真理としての抵抗概念

ところでボルノー独自の精神科学における真理と実存の関わりについて論ずる場合、先述のいわゆる普遍妥当的でない真理の可能性について論究することから出発するのが好都合であろう。当然のことながら、この精神科学における普遍妥当性の放棄は、客観的真理と主観的恣意との厳密な相違をあいまいなものにすることを意味するものではない。すなわち、「真の解釈は、その対象を提示し、現実を開示し、そうして対象とのいつも新たな出会いにおいて、ますます大きな豊かさを開示する」[12]（傍点筆者）が、反対に「単なる恣意や浮わついた思弁は作品自体の適切なよりどころに出会わず、創造的な対決にもいたらず、むしろいわば短絡的に自己自身の中に迷いこんでしまう。」[13]

ここでいう「短絡性」とは、種々の事物自体に抵抗が欠けていることを意味するが、これは純粋に物体的妨害のみならず、現実性に対するあらゆる関係へと拡大されうる概念である。そして精神科学的真理の主要な基準としてこの「抵抗概念（経験）」が取り上げられねばならないだろう。[14]ボルノーによれば、この事物の抵抗（der Widerstand der Sache）の形式は、今や精神科学においてこれまで自然科学における「普遍妥当性」の要求を満たしたような能力を引き受ける、という。この点を松田高志は次のように指摘している。「事物の抵抗」は「認識が主観的に空転したものでなく、即物的sachlichである限り必ず手応えを持っている。そもそも真理の獲得が、白紙状態の心に何かが刻印されることではなく、むしろ既に持っている理解

（前理解Vorverständnis）が破られることによって初めて可能になるとするならば、そのやぶられる際の痛苦は、事柄自身の力による」[15]（傍点筆者）のであると。さらに川森康喜も明確に、事柄の抵抗は実は出会いの意味であることを以下のようにまとめている。すなわち「わたくしに立ち向かう現実の圧力によって揺り動かされて、今までのわたくしが追いだされるという出会いそのもののうちに事柄の抵抗をみる」[16]と。

このような出会いの真正性において開示される真理は、唯一真に経験される「触れ合い」（抵抗経験）のうちにのみ存するからである。モウレンハウァー（Mollenhauer, 一九二八年―）は彼の論文（Das Problem einer empirisch-positivistischen Pädagogik）のなかで、「出会い」の概念などというものは（別の比較できる概念である教養・権威・教育的な関係などと同じように）厳密な学問研究の分野ではまったく無意味であり、「出会い」概念は「非科学性」以外の何ものでもないと決めつけてボルノーを批判している。[17]しかしボルノーは、この「出会い」概念が客観的な基準を欠いているからといって、それはけっして主観的なあいまいさのうちに逃れることではないことを明確に論証しようと試みてゆく。ボルノーはこの「出会い」の核心に、一切の主観的な恣意がそれによってぶつかって壊滅する真正に経験された「精神的実在の抵抗」（der Widerstand einer echt erfahrenen geistigen Realität）が存することを確信している。[18]

すなわち、この事物の抵抗は「単なる主観的恣意に対して認識の客観性を確実にする能力を引き受ける」[19]（傍点筆者）のみならず、実存的な出会い概念の萌芽を孕むものである。ここで、抵抗経験という精神科学の真理基準は、「事物自体との現実的交わりの中で各人によって実際に検証されねばならないという欠陥をもつ」[20]ものの、精神科学的真理の客観性はこうした実存的な側面からのみ意味深く考察されうる、というボルノー独自の見解は高く評価されるべきであろう。換言すれば、認識が事柄自体の抵抗経験に突き当たることによって確証される精神科学的真理の客観性は、すべての人に同一の普遍妥当的な仕方で形成されることはありえない。だからこそヴィンデルバンドは一回限りの特殊性の重要性について強調するところの精神科学を「個性記述的な学問」と定義しえたのであった。ボルノーはこのように反復可能で可測的なものへ還元しうる法則定立的で自然科学的な真理の基準

としての普遍妥当性と、あるがままの自己の現実から出発する一回限りの精神科学的真理の基準である客観性とをことさら区別するところから出発し、これを次のように定式化した。「このような意味での客観性という概念は、精神科学が主観性の関与にもかかわらず、自己の対象をそれ自体の本質から理解することができると強調しようとするときに、現われてくるのである。」(21)と。

それ故、これとの関連でこの正しい主観性がいかに精神科学的真理の基準としての客観性に結びつくのかという点が次に問われなければならないだろう。ボルノーによれば真の主観性とは、「内面的・人格的に関与づけられた状態として、つまり人間が認識されるべき真理の内容に関心づけられている状態」(22)として理解されており、それ故に真の主観性における核心とは、人間とその認識との間の実存的な関わりでなければなるまい。このような主観性の一回限りの実存的出会いのなかでのみ、真の現実性が開示されうるとするならば、ここにボルノーの精神科学における真理概念がなぜディルタイの生の哲学的範疇に収まりきらず、さらには実存的な出会い概念へと突き進む必然性が存したのかという根拠をわれわれの眼前に提示してくれよう。それ故、次節の結論においてはボルノーの真理論において何故、実存的出会い概念が必要不可欠の要素であるのかを論究して本稿を閉じることにしたい。

註

(1) ボルノー著、西村皓訳、「教育の思想と教育学」、『教育学全集　二』、小学館、一九七七年、増補版第三刷、三二五頁。

(2) O. F. Bollnow, Das Verstehen. Drei Aufsätze zur Theorie der Geisteswissenschaften, Kirchheim, Mainz. S. 78 . f. 小笠原道雄・田代尚弘訳『理解するということ』、以文社、一九七八年。

(3) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 86.

(4) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 78.

(5) Vgl., O. F. Bollnow, Die Objektivität der Geisteswissenscaften und die Frage nach dem Wesen der Wahrheit, S. 133.

(6) O. F. Bollnow, Das Verstehen, S. 80.

(7) Vgl., J. Kraft, Die Unmöglichkeit der Geisteswissenschaften, 1934.
また岡本英明教授の論文「精神科学的教育学の『終焉』?」(長崎大学教育学部教育科学研究報告、昭和五五年、第二八号、四七頁−五一頁。)もこのテーマをめぐって厳密な論究が展開されている。そこでは、むし

ろ現在こそ、精神科学的教育学の始まりであることを現代ドイツ教育学の研究方法論の視座から鋭く考察されているが、ここではこれ以上その内容について触れることはできない。

(8) O. F. Bollnow, Das Verstehen. S. 81.
(9) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 81.
(10) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 81.
(11) Vgl., O. F. Bollnow, Die Objektivität der Geisteswissenscaften und die Frage nach dem Wesen der Wahrheit, S. 136. f.,
(12) O. F. Bollnow, Das Verstehen, S. 83.
(13) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 83.
(14) ボルノーは彼の論文「精神科学の客観性と真理(Die Objektivitäi der Geisteswissenscaften und die Frage nach dem Wesen der Wahrheit)のなかで、真理の基準として①事物の抵抗 ②超主観性 ③真理の前提としての内的真実の三つの条件を挙げており、川森・松田両教授の論文もその点についての詳細な分析が展開されている。なお本論においては上の三つの真理の基準のなかでもきわめて重要なものと思われる「事物の抵抗」に焦点を絞って考察を進めていることを断っておかねばならない。
(15) 松田高志著、「ブーバーにおける認識の問題」、神戸女学院大学論集、第二号、一九七七年、七八頁。
(16) 川森康喜著、「ボルノーにおける真理の本質」、教育哲学研究、一〇号、一九六四年、六〇頁。
(17) ボルノー著、浜田正秀訳、『人間学的に見た教育学』、玉川大学出版部、昭和五六年、第二版四刷、二〇四頁参照。
(18) Vgl., O. F. Bollnow, Existenzphilosophie und Pädagogik.S. 112.
(19) O. F. Bollnow, Das Verstehen, S. 85.
(20) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 85.
(21) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 86.
(22) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 87.

四　結語　実存的な出会い概念における真理

ところで、先述の実存的な出会いの概念はなによりM・ブーバー(M. Buber, 一八七八－一九六五)の名前と結びつく。彼の「我－汝」の出会い概念に至る強靱な思索もまた当時の生の哲学の主観主義的あるいは観念的な自我の概念を越え出ようとする試みでもあった。ブーバーが「真の生は出会いである」と力説するとき、それはもはや生の哲学の範疇における「自我」では捉えきれない、根本的に同等の力をもつ実在――我と汝――の邂逅を示唆するものであったはずである。「ブーバーはこの場合、生ける[汝]の世界を、客観的(筆者註、ここでの「客観的」はボルノーのこれま

での文脈からいえばむしろ「普遍妥当的」の意味に近い。）で即物的な連関を意味する［それ］の世界とまったく異質的なものとして、区別[1]しようとした。さらにボルノーによれば「我－それ」の即物的な世界は見通しのきく統一的で計量可能な事物と関連するのに対して、「我－汝」の出会いの生ずる実存的な世界では、他のすべての汝との出会いを排除する排他性を特色とし、そこでは計量も比較も消え失せ、さらに真の汝は自己の対峙者として常にただ一つの実在として私に迫ってくる。このような出会いは「［私］のがわから見れば、つねに、予見できない出来事」[2]であるばかりか、「それは、人間をふかくめぐむところの経験」[3]つまりは、すべての出会いは究極的に人間に与えられている「賜物」であり「恩寵」でさえある、とブーバーをして語らしめている。

また谷口龍男によれば、「出会いの本質的特徴は、かれにおいて、われとなんじとの関係、すなわち、われとなんじとが互いに向かい合って（gegenüber）、とらわれのない開けた心で直接的な関係を結ぶ……そういう出来事である。」[4]さらに谷口は続ける。こうした「出会いはその都度瞬間において生起する一回限りの独自の性格を有するものであるから、ある一つの状況において、独自な仕方で生起する一回限りの出会いを一般化して、内容的に固定することはできず、もしそれを誰にでも妥当するような客観的一般的命題にするならば、その本質は失われてしまうことになる。」[5]と。こうした他者との出会いによって、人は「従来の観念で予期していたのとはまったく異なったもの」[6]に出くわす。この「度の強い非連続的な出来事」である出会いは「人をこれまでの発展の道筋から投げ出し、あらたにはじめからやり直すように強いるものである。」[7]この実存的出会い概念が前述の精神科学的真理としての抵抗概念と軌を一にするものと思われる。

こうしたブーバーにおいて基礎づけられた「出会い」概念は、精神科学の哲学における一つの根本問題であるにもかかわらず、未だに体系的な着手はなされていないと指摘するボルノーはさらに続けて言う。つまり、一九世紀以降急速にその市民権を確立してきた精神科学は、「人類がかつて、さまざまな民族においてつくりだした一切のものを学び知り、自己のうちに吸収し、これを、もっとも異なったものが仲よく相並んで位置をしめる巨大で包括的な一つの人間精神像に、まとめあげようとする意志」[8]で貫かれていたにもかかわら

ず、こうした多様な可能性の内にのみ留まっているかぎり、真に本来的な自己は現成しない。むしろ多のなかから一つのものを自己のものとして選択し、必然的に特定の立場を決定することにおいてのみ、人間は実存的な真理に触れることが可能となる。「それは、わたし自身が、精神的世界のうちにあって、まったく確定した立場をとるという、絶対的な意味における価値判断」[9]を必要不可欠なものとする。近代フランス哲学は、この人間の在り方を実存的な「アンガージュマン」（参与）という概念で適切に表現してくれているが、このアンガージュマンと精神科学との関わりについてボルノーは次のように述べている。「精神科学においては、原則として、感情的な立場決定に依存しない了解というものはない。なぜなら、目前にあるさまざまな表現のうちに含まれる意味を把捉することでさえ、つねに、ある一定の先行的な了解にもとづいているのであるが、また、この先行的な了解は、かならず、それ自身のうちにすでに、ある一定の、……感情的な、価値判断をふくんでいるからである。」[10] さらにボルノーによれば精神科学の学的性格を強調するあまり感情や価値判断を排除しようとするならば、その学的性格は個々の没価値的な事実を確証することでしかなくなる。元来、個々の没価値的な事実は自然科学の対象であり、精神科学の対象となることはありえず、精神科学のそれは、むしろ精神的世界の内部にのみ見いだされうるものでなければならないことは前半の箇所で述べてきたとおりである。

さらにボルノーによる精神科学の独自の解釈によれば「人はまず価値判断をくださなければならない、そののちはじめて了解することができる、という結論である。それは、一切の了解はそれに先行する価値判断との結合をさけえないということ……を認めざるをえないという意味である。」[11] 別の箇所でもボルノーは次のことを確信している。精神科学の方法論的自立の基礎づけに際して、ディルタイが「説明すること」(Erklären) と「理解すること」(Verstehen) を区別したことは周知の事実であるが、ここで重要なのは精神科学における「理解」が自然科学における「説明」と同格的なものではないという点である。つまり「人間がそもそも生きるかぎり、人間は理解する」[12] というボルノーの言説の意図するところを敷衍すれば、「理解」はいつも比較的根源的かつ基礎的能力であり、さらに「説明」はこのような能力に基づいて「理解」した後に初めて成立するものでなければならない。[13]

ボルノーによれば「少なくとも精神科学においては、個々の認識はさまざまな糸を通して人間の究極的な真理へと結びついているということ」[14]そして「われわれが究極的な真理をもつのは、所有としてではなく、ただ冒険としてのみである。」[15]といわれているがこれは以下のことを意味する。つまり、ここでボルノーが把捉する真理とは、理解に基づく態度決定の前提にあるのではなく、人間が価値判断する理解の具体的な過程のうちに共々（Miteinander）に存するだけであり、さらに言えば、精神科学においては「わたしがわたし自身をこの究極的なものにおいて問題に付し、わたしのこれまでの一切の見解を排棄するようにわたしを強いるなにものかをあえてそれにおいて経験しようとするかぎりにおいてのみ、わたしの理解の働きは成立する。」[16]ということに他ならない。しかし、ここで誤解されてならないのは、自然科学的で普遍妥当的な基準を欠いているからといって、今述べたこの精神科学的な真理は「主観的なあいまいさのうちにのがれることでは決してない。それどころか、かえってそれは、一切の主観的な恣意がそれにぶつかって壊滅する、真正に経験された精神的実在の抵抗である。」[17]こうして先に触れた抵抗概念が端緒となり、ボルノー独自の「出会い概念」をその基礎とする実存的な真理論が形成されてゆくのである。

この次第をこう言い換えてもよいであろう。ボルノーはごく最近の講演において、出会いは「人間を仮借なく彼の実存の要求の前に立たせる前面的な衝撃を意味している。……すなわち人間は出会いのなかで耐えることにおいてはじめて彼自身になるのである」[18]（傍点筆者）と。さらにこの実存的な意味での出会いにおいて「人間は、運命的におのれに立ち向かってくるものを通して徹底的な転換を余儀なくされるので、このようにしてのみ人間はおのれの本来の自己を実現しうる」[19]と。ここでボルノーの次の言説は注目に値する。彼は古典的・人文主義的な意味での「出会い」を「見知らぬ世界に接して、これを知ることによって、自分自身の精神的世界を豊かにすること」[20]と定義したうえで、ボルノーのいう実存的な「出会い」概念と明確な区別を強調している点である。つまり、古典的・人文的な出会いにおいては包括的な陶冶過程で生を豊かにする作用が含まれるだろうが、そこにはボルノーの強調する精神的実在の「抵抗経験」は存しない。松田もこの点を次のように鋭く指摘している。リット（T. Litt, 一八八〇－一九六二）的な古典的・人文主義的

な出会いにおいて「確かに『他なるもの』との遭遇、交渉が強く言われるにしろ、それは自己の生の富裕化即展開の為である」[21]と。この自己の生の富裕化即展開という古典的・人文主義的な出会い概念は以下の点でボルノーのいう実存的な出会い概念と決定的に異なる。つまり、ボルノーのいう出会いとは、「本来的自己」へと決断を強いる仮借なき他者との遭遇であり、思いがけなさを含むものであり、それを「事物の抵抗経験」と総括している。[22]

ボルノーはこの一点で彼独自の実存的な出会い概念の意義を以下のように特徴づけている。たとえば「出会い」と並んで「訓戒」や「訴え」もまた「人間を惰性のなかでの没入状態から引き戻そうとする努力」[23]に他ならないが、これらの概念もまた、まごうかたない眠れる人間に対する「抵抗経験」そのものにちがいない。それとの関連で、まどろんでいる諸可能性を掘り起こす「覚醒」にしても、教育行為につきものの「挫折」にしても、これらの概念すべては、実存的な契機が真価を発揮するその根底に一切の主観的な恣意がそれにぶつかって壊滅する真正に経験された「精神的実在の抵抗」経験として捉えることは十分可能ではないだろうか。

それゆえ、これらの事象はきわめて辛く苦しい仕方でわれわれ教育者や子どもたちに迫ってくる。と同時にどの事例においてもこれら一切の教育的な出来事は危険を伴わない傍観者的な「観察」的態度のうえに立つ教育科学の対象領域を根本的に考え直すことを強いるものではないだろうか。成長のままに放任するという有機体論的教育観も、教育者の意識的・目標志向的な製作的機械的教育観もここではもはや適用しない。[24]

このようにボルノーは教育学における実存的な出会い概念を、精神科学的な哲学的考察をとおして解明しようと試みるがその際、彼は明確に「出会いの本質の問題は、精神科学の方法的自覚の中心問題である」[25]と結論づけている。つまり、理解するものと理解されるものの両者の間で、この出会いの冒険に自らを引きわたす用意ができているときにのみ、実存的な出会いを媒介とする精神科学的な真理が初めて獲得されるという。[26]この出会いにおいて遂行される理解は危険を伴わない傍観者的な「観察」すなわち、自然科学的な「鏡としての真理」とその本質を異にすることはいうまでもない。「なぜならば、このさい開示される理解の真理は、決して外から、先行の基準によって認識さ

れるものではなく、ただ、実際の出会いそのもののうちにおいてのみ、明るみに出るものだからである。」[27] そしてこの二つの真理の仮借なき緊張関係の中でのみ、理解するものは自己自身となる。こうして本来的な自己存在を獲得するためにはこの出会いの道を歩む以外の方途はないことを深く確信するボルノーは次のように真理の核心をまとめる。すなわち、これは危険を伴わない自然科学的な観察態度と正反対の立場であり、ここではただ「現われくる可能性をとらえ、それにみちびかれて了解が深みにまで迫ることだけが、重要」[28] なのであり、さらに開示される理解の真理は、普遍妥当的な基準によって認識されるものではなく、アンガージュマン（参与）をとおしての実存的な出会いそのもののうちにのみ存するものでなければならない、と。

以上、われわれは「認識真理」とより深い「存在真理」についての関連を様々な事例を通して考察してきた。本稿では、厳的な存在真理と深く関わる精神科学的認識においては、特に他者との抵抗概念を介して成立する「出会い」という実存様式にその究極の本質を見い出そうとしているボルノーの思想を中心に論を展開してきた。しかしこれは序でも触れたとおりボルノーの比較的初期の著作での思想的特徴であり、それ以降の一九七五年の『真理の二重の顔』では、認識真理と存在真理の二つの緊張関係の重要性の指摘がむしろ際立っているように思える。そこでボルノーの真理論についてさらに考察を進めるならば、この方向での分析が必然的に今後の課題となってくるであろう。

註

(1) O. F. Bollnow, Existenzphilosophie und Pädagogik. Versuch Über unstetigen Formen der Erziehung. Kohlhammer, Stuttgart, 6 Aufl., 1984 .S. 88. f. 峰島旭雄訳、『実存哲学と教育学』、理想社、一九八七年。第一三刷。
(2) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 89.
(3) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 89.
(4) 谷口龍男著、「われとなんじの哲学――マルティン・ブーバー論――」北樹出版、昭和五八年、第三刷、三五頁。
(5) 谷口龍男著、前掲書、三五頁。
(6) O. F. Bollnow, Existenzphilosophie und Pädagogik. S. 99.
(7) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 99.
(8) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 102 .f.
(9) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 105.

(10) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 106.
(11) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 108.
(12) O. F. Bollnow, Das Verstehen, S. 94.
(13) Vgl., O. F. Bollnow, a. a. O. S. 95
(14) O. F. Bollnow, Existenzphilosophie und Pädagogik, S. 109.
(15) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 110.
(16) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 110.
(17) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 112.
(18) ボルノー著、「出会いの問題」、文化と教育、（日独協同研究誌）一九八六年、東洋館出版社、七号、一〇頁。
(19) ボルノー著、前掲書、一二頁。
(20) ボルノー著、前掲書、一〇頁。
(21) 松田高志著、「『我―汝』思想研究――「出会い」の概念について――」大谷大学哲学会、哲学論集、一七号、三五頁。
(22) 松田高志著、前掲書、三五頁参照。
(23) ボルノー著、「出会いの問題」、文化と教育、一三頁。
(24) ボルノー著、前掲書、一四頁参照。
(25) O. F. Bollnow, Existenzphilosophie und Pädagogik. S. 111.
(26) Vgl., O. F. Bollnow, a. a. O. S. 111.
(27) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 112.
(28) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 111.

脱稿一九九〇年一〇月八日

付記

本論は一九九〇年十月二七日、流通大学で開催された第四二回関西教育学会の口頭発表に加筆したものである。